

近代日本の「南方関与」：趣旨説明

早瀬 晋三

(大阪市立大学)

今年が戦後50年にあたることは、ちょうど1か月前をピークに、耳にタコができるほどお聞きになったことと思います。戦後50年を期して、「国家として謝罪する、しない」の議論をはじめとして、今年はいろいろな角度から、戦後50年を見なおす議論が行なわれております。しかし、わたしたち歴史家は、この戦後50年論議のなかで、大きな危惧を抱いていることがあります。ひとつは、戦後50年を境に日本の戦後は終わったとして、今後戦争について議論しなくていいということになりはしまいかということです。もうひとつは、戦後をスタートとして、日本の近現代史を語られることです。明治維新から戦争にいたるまでの70年あまりの年月が、日本の近現代史から抜け落ちることへの危惧があります。現在の日本を考えるにあたって、その原型を明治に求めるものが多々ありますし、なにより戦争にいたる歩みを検証しなければ、わたしたち日本人がなぜ戦争をするにいたったのかわからなくなります。悪い人がいて、平和を愛する善良な市民を戦争へと駆りたてていたのであれば、問題はないのですが、戦争へといたる道はそんな単純なものではありません。いまも、世界各地で平和のための戦争が行なわれているではありませんか。平和を愛し、平和を唱えているだけでは、戦争を止めることはできません。日本が戦争をするにいたった理由を明らかにしなければ、平和を願いながら日本は再び同じ論理で戦争に突入していくことになりかねません。わたしたちは、戦争へといたる歩みを、明治以来の「南方関与」のなかに見いだそうとしています。

わたしたちは、この2年間半、文部省科学研究費重点領域研究「総合的地域研究」の「南方関与の論理」班として、「近代日本の『南方関与』」について討論を重ねてまいりました。その成果を、きょうここで披露し、鹿児島のみなさんと議論していこうとしています。まず、清水元先生が第一次世界大戦期を中心に「アジア主義」と「南方関与」について議論されます。つぎに、わたくし早瀬晋三が、フィリピンをめぐる明治期「南進論」と「大東亜共栄圏」の関係をお話し、最後に、波多野澄雄先生に、戦争中の「アジア新秩序論」と戦後構想についてお話をさせていただいて、締め括っていただきます。時代順に話を進めてまいりますので、歴史的な流れを汲みとっていただけると思っています。戦後50年を、500年、1000年とはいいいませんが、100年くらいの、もう少し幅広い時間的空間のなかで、また「南方関与」との関係で考えていただければ、このシンポジウムは成功ということになります。4時間近くにわたる長丁場ですが、最後までお付き合いのほど、よろしく願いいたします。